
SPD ~ 究明課

ゼータ 如月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SPD〜究明課

【Nコード】

N3847Z

【作者名】

ゼータ 如月

【あらすじ】

…市民から信用を失った警察。彼らは罪のない人々を確信のない証拠などで逮捕するということが続けてしまったため、人々からは疑いの目で見られることがなくなってしまった。警察は正義を取り戻したい、そう考え、殺人事件の原因・追究に特化した部署、究明課を設立した。

彩文弁護士殺人事件〜探求編（前書き）

どうもゼータ如月です。あまり自信はありませんが、推理物に挑戦したいと思い、書いてみました。まだまだ未熟者なので、いくつかあった案のうち、一番軽いものからあげてみました。よかったら推理とかしてもらえたら嬉しいです。

彩文弁護士殺人事件〜探求編

∴ 2019年3月21日 ？？：?? 彩文法律事務所

「彩文さん！お願いだ！」

「何度いつても、私は君の意見には反対だ！」

「そうか・・・彩文さん、あくまでそういうのか・・・、残念だ・・・。」

「さあ帰りましたえ。」

その直後、ガツンという鈍い音が室内で響いた。

∴ 2019年3月21日 21：08

彩文法律事務所に男が資料を取りに戻ってきた。

彼はそこで、床に横たわる彩文弁護士の姿を見た。

「さ、彩文さん！」

彼は急いで警察へ通報した。

- 1 取調べ編

∴ 2019年3月21日 21：29 彩文法律事務所

現場に3人の警察官がやってきた。

男は第一発見者として、取調べを受けることになった。

「あ、どうも。僕は警視庁究明課の吾妻です。」

「究明課……つてなんですか？」

男は疑問に思ったため、吾妻に質問した。

「僕達は昨年に冤罪などを事前に防ぐため、秘密裏に作られた課なんだ。

善意のあり、知識のある人間だけを一般市民を介入し、そこからチームを作る。

僕達三人はそこから選ばれたんだ。鑑識の天谷、記録係の浦林。」

「は、はあ……。」

困惑した様子で男は聞いていた。

事件現場は見ての通りだ。

まったく荒らされた形跡がなく、後頭部を強い鈍器で殴ったようである。

どうやら即死だったようで、ダイニングメッセージなども残っていない。

現場に凶器になるものは灰皿、懐中電灯、置時計ぐらいである。

置時計は正常な時間で動いており、壊れていない。

灰皿は使われた形跡もなく、新品のような輝きを見せている。

懐中電灯は誇りを被っている。

明らかな殺人事件、吾妻を現場をひとつずつ見ていく。

「えーと……お名前は？」

「あ、鳥山^{とりやま}明治^{めいじ}といます。彩文先生の下で見習い弁護士をやっています。」

「鳥山さん、まずあなたのお話からお伺いさせていただきますが、いいでしょうか？」

「はい、構いません。」

『そうですね、今日は朝に事務所へ出勤しました。

10時頃ですかね・・・1時頃まで雑務をこなしていました。

その間に何人かお客様が来ていましたね。』

『そこからランチに行き、2時35分から弁護士会の集まりで勉強会にいらっしゃいました。

それが終わったのは4時過ぎでしたね。』

『5時半頃に事務所へ一度戻り、荷物だけ持ってうちへ帰りました。

』

『そして忘れ物に気づき、事務所へ行って到着したのは9時頃でしたね。』

「・・・なるほどね。ところで誰が尋ねてきたかはわからないのですか？」

「ああ、それならそこにある訪問者記録を見ればわかりますよ。」

天谷は記録を手にとると、メモ帳に次々と来訪時間と帰宅時間と名前をメモしはじめた。

『来訪09:23	帰宅10:39	<small>たかつぎ こうすけ</small> 高槻浩介
『来訪10:50	帰宅11:17	<small>きすぎ なおみ</small> 来生直美
『来訪12:01	帰宅12:56	<small>とだ ゆづき</small> 戸田勇気
『来訪17:11	帰宅17:47	<small>やべり ゆういち</small> 矢部龍一

「この4人ですねー、来てるのは。」

「明日、その4人はここに呼び出して事情聴取といこうか。」

天谷、すっかり現場写真は抑えておいてくれ。今日は交代制で現場の見張りだ。」

現場の向かいの貸会議で事件の日に事務所へ入った人物が集められた。

昨日の記録に書かれていた4人である。早速、1人ずつ取調べを別室で行うことにした。

まず、最初に訪問した高槻浩介からだ。彼はスーツ姿の若者で、歳は23。

今回は相談というより、挨拶と雑談をしに来ていたらしい。

『・・・そうだな、俺は彩文さんには大学時代にお世話になってね。論文書くときに力を借りたんだ。心理学専攻しててね、依頼人の話とか聞いたりしたんだ。

今年無事卒業できたから挨拶しに来たんだ。その後新しい仕事についての話をしたりしてね。』

『俺は9時ごろお伺いして、10時半ぐらいにここを出たよ。新しい職場はこのビルの最下階の事務所さ。』

『誰ともすれ違ったりはしてないよ。』

次は来生直美、彼女は今年で30歳の人妻で、夫の不倫についての話をしていたらしい。

『・・・そうね、私は11時ごろにここにきて、20分ぐらいで帰ったわよ。

来る際に1人スーツを来たお兄さんとすれ違ったわね。

何やら急いでいたみたいだけど、詳しくはわからないわ。』

『私は夫の不倫を訴えようと先生に相談していただけ。

今日は話をただで、詳しいことは話してないわ。』

『それからはそうね・・・家にずっといたわよ。息子が証明するわ。』

『帰りは1人清掃員のおじさんとすれ違った程度だわ。』

次は戸田勇気。彼はフリーターで、普段はあまり外出したりはしないらしい。

歳は29で、そろそろちゃんとした仕事につかないと、と考えていたとのことだ。

『僕は彩文さんに新しい仕事の相談をしていたんだ。時間はたしか・
・一緒に昼食へに行ったから12時ぐらいかな。』

『なんで?と聞かれても、パパのお友達で昔からよく知ってたし、話をよく聞いてもらってたんだ。』

『昔から凄く厳しい人だったけど、根はいい人なんだぞ!』

『行きは清掃員のおじさんにあつて、帰りも同じ人見たよ。』

最後は矢部龍一、彼は小さな会社の社長で、歳は48。

今回倒産するか否かの相談をしていたらしい。

『倒産させたくない、そういう話をしてどうにかなる方法はないか相談していたんだ。』

『だが、彼はそういう方法はほとんどないって言ってね、そこをどうにかって頼み込んでいたんだよ。』

『30分ぐらい粘ったら、何か考えましょって言うってくれてね。』

『そこからは上機嫌に帰ったよ、いい話をできたなあって思いましたね。』

『行きも帰りも誰も見てないよ、あ・・・でも帰りは清掃員の人らしき人はいたかもしれないね。』

4人の取調べが終わり、吾妻は記録を並べて考え始めた。

天野の話によると、死亡推定時刻は17:00~18:30の間で頭部の殴打による即死が死因のようだ。

後ろから不意に殴られたらしく、凶器は懐中電灯、灰皿、置時計のいずれかを利用したと考えられているらしい。

吾妻はビルの建物内にある他の事務所や、下の喫茶店などに聞き込みをはじめることにした。

- 2 聞き込み編

： 2019年3月22日 13：11 アスティアスビル4F 有限会社ギルの事務所

吾妻は最初の訪問者である高槻が入社する予定の会社の事務所へと向かった。

こじんまりとした部屋に、パソコンがいくつか並べられている。中は結構綺麗で、清潔感は漂っていた。

話を聞くのはこの取締役の柳さんに話を伺う事にした。

『そうだねー、高槻君は就職活動に凄く難航したらしいよ。』

『特にね、成績がネックとなってなかなか決まらなかったみたい。

うちは元々人数不足だしねー、彼が無事卒業できたらいいけど。

そうそう、アルバイトとして働いているよ今は。今日も着てたし。』

『彼なら昼頃やってきて、夕方には帰ったね。』

ほら、タイムカードには17：51って書いてるしね。』

これが彼が教えてくれた証言だ。

次は話にも何回も出てきた清掃員だ。

だが、彼は今日来ていない、ということまで話を聞くことが出来なかった。

彼の勤務時間は昨日は朝方から夕方5時すぎまで、ということだったという事は聞いた。

「天谷、何かわかったことはあるか？」

「そうだね、死んだ彩文さんだけど、背中に少し汚れがあったね。」

たぶん煙草の吸殻かな。

ただ本の微少で、正直灰皿で殴った材料になるか、と言われるとわからないかな。」

「そうか・・・他には？」

「あとあの日の訪問者で煙草を吸うのは高槻、戸田の二名だけだ。」

「・・・よし、なら少し部屋の状況がどうだったか聞いてみるか。」

- 3 状況の取調べ編

∴ 2019年3月22日 15:35 貸会議室

「それでは・・・すみませんが、もう一度お尋ねしたいことがあるので、みなさんお願いします。」

では、まず高槻さんからです。」

「・・・そうだね、部屋の状況はいつもと変わらずだったよ。」

あえて言うなら、煙草を僕は吸っていたから灰皿は煙草だらけだったよ。」

「煙草はかなり吸う方だからね、結構においとかついたんじゃないかな。」

「・・・さて、次は来生さん。」

「部屋に入った時の印象ね、まず煙草の臭いが凄かったわ。」

灰皿もたんまりしてましたからね。」

「他は変わった様子はありませんでしたよ。」

「・・・さて、次は戸田さんお願いします。」

「あー、僕は煙草は吸うけど、一本しかあの日吸わなかったなあ。」

灰皿も綺麗だったしね。』

『臭いは窓が開いてたし、換気してたから気にならなかったよ。』

『現場には灰は飛び散ってなかったんでしょ？僕はやってないですよ！』

『先生と二人だったからって疑わないでくださいよ！』

「・・・最後に矢部さん。」

『部屋の雰囲気・・・特に変わった様子はなかったですよ。』

『綺麗に片付いていたし、私の話が終わったら帰る予定だったんじゃないんですかね。』

『私達はいつも通り、殺風景な部屋で二人でいましたよ。』

『あーでも、少し大切な用事があるのかなんとか、最後いった気はします。』

『灰皿ですか？あまり見てなかったですね・・・。』

4人の改めて聞いた話はどれも普通の内容である。

大切なことはいくつか聞けたが、どうも納得のいかないポイントがやはり見当たる。

吾妻は今までの発言と、現場の状況を再び見返した。

「そうだね、今回の事件は至ってシンプルだ。

何故なら、おかしい点がいくつかあるからね。」

ひとつひとつ調書を眺める。

証拠品リストにも、いくつかに目星をつけていた。

そして、何よりも気になるのはあの発言だ。

「犯人は恐らく彼だろう、よし、それでは早速説明をして、話を聞こうじゃないか。」

彩文弁護士殺人事件の解答編

「刑事さん、犯人がわかったのですか？」

高槻はそう声を張り上げた。

彼は彩文に対してとてもお世話になった経緯があったのか、凄く気にしていたようだ。

ただ、周りの視線は冷たいものであった。

「君がやったんじゃないのか？」

鳥山はそう声をはりあげると、高槻は睨みつけるように鳥山の方へと視線を向けた。

張り詰めた空気の中、吾妻は淡々と話をし始めた。

「まず、彩文さんがいつ殺されたのか？が今回とても重要なポイントです。」

「死亡推定時刻は今回、17:00～18:30の間と限定されています。細工が行われた形跡ありません。」

「その上で、今回凶器になったものは灰皿であることもほぼ間違いないでしょう。」

その発言に対して、来生は少し疑問を感じていた。

それもそのはず、灰皿を使ったなら、現場に灰がまったくないことに疑問を感じていたからだ。

「どういふことかしら？」

「それについては戸田さんと矢部さんの証言からきっちり得ることができています。」

なので、現場で使われた灰皿には一本しか煙草は入ってなかったんですよ。」

「なるほどね……、で？刑事さん犯人は誰なのですか？」

戸田さんが口を開くと、緊張した空気が流れ出した。

だが、吾妻はそれに屈することなくしゃべり続ける。

「犯人は……そうですね。犯人は間違いなく、鳥山さん。あなたですよ。」

「な、なんだって!？」

鳥山は取り乱して叫び始めた。

それはない、その一点張りである。

「何故だ！私が犯人というなら、証拠はどうだ！」

「証拠も何も……あなた自身が証言したじゃないですか。」

5時半頃に一度ここへ戻ってきたと。」

「そもそも、それがおかしいですよ。」

矢部さんは二人つきりで会話をしていました。

それに灰皿についてはあまり見ていなかった。

そして部屋も綺麗になっていた、つまり彩文さんは矢部さんが来る前に

掃除を済ませていたんですよ。だから煙草のにおいもあまりしなかった可能性がある。」

「そ、それだと状況証拠だけではないか!？」

「さらに言うなら、このビルのこの階へ今日来た人物は相談に上がった4人、清掃員、そしてあなた。」

この6人しかいないのですよ。」

「そ、そこにいる高槻も可能じゃないのか？」

「彼についてはたしかに死亡推定時刻範囲内の犯行だろうね。」

ただし、矢部さんの証言も今回鍵になっているんですよ。

矢部さんは帰りに1人、人を目撃しています。

清掃員、と勘違いしたみたいですけど、清掃員はもう仕事が終わってあがっています。

恐らく、殺人をしいったあなた、あるいは高槻さんのどちらかしか犯行はまず不可能です。」

「だ、だからいつて！その矢部って人が犯人の可能性は・・・！」
「彼が犯人はないですよ、あなた自身の証言がそれを物語っています。」

あなたは30分ごろにここへ来たんですよ、忘れ物をとりに。

しかし、矢部さんの証言ではあなたの話は一切でてきませんでした。」

「う・・・ぐ・・・。」

「あなたが実際ここへ来た時刻は17:50分頃ですね。」

「そ、それは・・・。」

「もう言い逃れはできませんよ！あなた自身が発言したのですからね！」

「そ、そんなばかな！わ、私じゃない・・・！」

おろおろしながら反論を続ける。

だが、力尽きたのか、途中で反論をしなくなった。

「あ、あの人が悪いんだ・・・。私を採用しない、そんなことを言い出したあの人が・・・。」

「わ、私は・・・ようやく弁護士になれる、そう思っていました。」

「だ、だが・・・あの人は私は役に立たないから採用しないって・・・。」

「この不景気の中、弁護士が事務所に所属する大変さ、あの人にはわからないですよ！」

「はは・・・はっはっはっはっ！」

鳥山はそう叫びながら、警官に連れて行かれた。

「・・・今回の事件、犯人自身が勝手に自滅した、そんな印象だな
天谷。」

「ああ、そうだな。」

二人は連れて行かれる鳥山の姿に何かを感じていた。

この記録はすべて浦林が記載した内容である。

これからも、いろいろな事件を解決しなければならぬ。

彼らの仕事は、まだあるのだから。

彩文弁護士殺人事件／解答編（後書き）

どうもこんにちは。

よく考えたらオチのつけ方って難しいですね……。ちよつとつたない文章になってしまいました。しばらく練習ついでにもっときつちりプランをたてて書かないといけませんね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3847z/>

SPD～究明課

2012年1月6日14時51分発行